

## 日本語の むし 虫 ムシ

「古事類苑 動物部十三 蟲上」に依ると

虫は、産の義にして、生化の多きより此の名ありと云へり。また古く、虫をハフムシとも称したるは、虫類の多くは匍匐するものなればなり。而(しか)して後世の本草書には、虫類を、卵生、化生、湿生等に分ちたり。上代には、虫害甚だ多かりしかば、大祓詞(おおはらえのことば)には昆虫の災と称して、是を国津(くにつ)罪(つみ)の一に数へたり。また蝗害の事も既に神代に見えたり。

我国養蚕の事は、天照大神の始め給ふ所にして、古来国産の一として、最も重んぜられる。後世松虫、鈴虫、促織(はたおり)、蟋蟀(きりぎりす)等の鳴声を愛するもの漸(ようや)く多く、聴虫、撰虫、放虫等の事、上下風流者の間に行はる。而して此等の昆虫を飼育する事も夙(はや)くより之れありしもの如し。

虫類中、蛇に関する事蹟最も繁多なり、是れ其の害毒夥(おびただ)しく、且つ其の性もまた獰悪にして、一種の靈異を有するものと信ぜられたるに由(よ)るなり。

要するに、古事類苑によると虫とは「歩き回るもの」「イナゴ」「カイコ」「鳴く虫」「へび」等。

小学館「現代国語例解辞典」では

1. 人、獣、鳥、魚、貝など以外の小動物の総称。主に昆虫類を指して言う。  
「虫にさされる」「虫の声を楽しむ」「虫の息[弱り果てて死にそうな息づかい]」「虫も殺さない[心の優しいさまの形容]」
2. 人体などに寄生する動物。寄生虫。特に、回虫をさす。  
「虫くだし」
3. 子供の病気で、原因がはっきり分からない症状の総称。特に、ひきつけなどをさす。  
「瘡の虫」「虫が起こる」
4. 人間の体内にいて、身体や感情などにさまざまな影響を与えると考えられるもの。  
「腹の虫がおさ、まらない」「虫がいい[自分の都合だけを考えて、他人のことなど全く考えない]」「虫が知らせる[予感がする]」「虫が好かない[なんとなく気に入らない]」「虫の居所が悪い[機嫌が悪く怒りっぽい]」「虫を殺す[腹が立つのをぐっとこらえて我慢する]」
5. 一つのことに熱中する人。異常と思われるくらいにその事にとらわれている人を指して言う。  
「本の虫」「勉強の虫」「絶滅危惧種」
6. 他の語と合して、そのような性質である人をあざけったり、卑しめたりして言う語。  
「泣き虫」「弱虫」など。

### 「虫」が下に付く語句例と「虫」の慣用表現

(むし)

穀象虫	青虫	米つき虫	羽虫	赤虫	真田虫	葉虫	みの虫
油虫	地虫	はさみ虫	裸虫	寄生虫	芋虫	髓虫	針金虫
刺虫	鈴虫	火取り虫	姐虫	象虫	船虫	馬追い虫	鉄砲虫
草履虫	甲虫	田虫	玉虫	松虫	かめ虫	孫太郎虫	髪切り虫
毛虫	栗虫	天道虫	鳴虫	鋤形虫	毒虫	娯虫	夏虫
黄金虫	南京虫	尺取り虫	根切り虫	水虫	つつが虫	木食い虫	
くつわ虫		いぼたろう虫	でんでん虫	へっぴり虫			

(ちゅう)

益虫	害虫	原虫	甲虫	昆虫	蟻虫	回虫	十二指腸虫	条虫	幼虫
成虫	鞭毛虫	夜光虫	精虫						

かんかん虫	点取り虫	泣き虫	弱虫	米食い虫	府の虫	芸の虫	
仕事の虫	ふさぎの虫	虫の息					
茶碗むし	土瓶むし	(ちがうかも・・・蒸し?)					

腹の虫の居所が悪い  
 飛んで火に入る夏の虫  
 一寸の虫にも五分の魂  
 蓼食う虫も好き好き  
 獅子身中の虫  
 大の虫を生かして小の虫を殺す  
 悪い虫がつく  
 腹の虫が治まらない  
 虫がよい  
 虫が知らせる  
 虫眼鏡 虫酸が走る

茶碗むし



むしケーキ



国語表現の中に「虫」が夥しくでてくる。虫の大発生と言って良いほどである。それだけ虫は私たちの生活の中に、良きにつけ悪きにつけ溶け込み、日々の生活を共にしていると言うことである。

これは、唱歌や童謡に非常に多くの虫が登場することからもわかる。最もよく知られている歌「手のひらを太陽に」(作詞:やなせたかし、作曲:いずみたく)では虫が主人公でもある。この歌が聞こえると、大人から子どもまで振りをつけて一緒に歌うのが普通である。この歌を英語に翻訳したら英語圏の人は「日本人は少し変・・・お友達になるのは考えた方が良くかも」と思うかもしれない。

## 英語のむし、ムシ、虫

bug〔昆虫〕

a baseball bug 野球狂  
 be bitten by the bug [=get the bug] 熱中する  
 He's got the tennis bug. テニスに夢中になっている  
 pick up a bug 病がうつる。  
 I've caught a bug. 私はかぜひきだ。

caterpillar〔いも虫, 毛虫, 青虫〕 毛虫《チョウ・ガの幼虫》。

insect〔昆虫〕

昆虫《insect は昆虫の最も一般的な語; worm はミズなど; beetle は甲虫》  
 虫けら同様の者。

worm〔みみず, ひる, うじなど〕

the worm of conscience 良心のとがめ  
 a worm of unease しのび寄る不安  
 Even a worm will turn. 《諺》弱虫でも怒れば怖い、一寸の虫にも五分の魂。  
 She wormed herself into his confidence. 彼女は巧妙に取り入って彼の信頼を得た。  
 I wormed the secret out of him. 彼からうまく秘密を聞き出した。

英語圏では「むし」に関する慣用句(二語以上が結合し、その全体が一つの意味を表すようになった短文表現)や熟語(二つ以上の単語や漢字が結合してできた語)が少ないのが特徴。これは文化の中で虫の占める位置が相当に低いことを表していると考えられる。

日英に共通しているのは、「むし」という言葉は他の言葉に虫のようにくっついて、物事をやや否定的に表現するのに使われる場合があるということである。

古事類苑(こじるいえん)

古事類苑は、明治政府により編纂が始められた類書(一種の百科事典)である。明治29～大正3年(1896～1914)に刊行された。古代から慶応3年(1867)までの様々な文献から引用した例証を分野別に編纂しており、日本史研究の基礎資料とされている。(wikipedia)

国際日本文化研究センター・古事類苑ページ検索システム  
<http://shinku.nichibun.ac.jp/kojiruien/index.html>